

## ・「道」としてのイエス

一同がゲッセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、「わたしが祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたが、イエスはひどく恐れてもだえ始め、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、こう言われた。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」それから、戻って御覧になると、弟子たちは眠っていたので、ペトロに言われた。「シモン、眠っているのか。わずか一時も目を覚ましていられなかったのか。誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」更に、向こうへ行って、同じ言葉で祈られた。再び戻って御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠ったのである。彼らはイエスにどう言えばよいのか、分からなかった。イエスは三度目に戻って来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。もうこれでいい。時が来た。人の子は罪人たちの手に引き渡される。立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」(マルコによる福音書一四章三二節～四二節)

「ゲッセマネ」は、「油しぼり」という意味です。オリーブの油をしぼる所だったのでしょうか？エルサレムの東側、キドロンの谷を少し登ったオリブ山西麓にあり、今も「ゲッセマネの園」を見ることができます。ここはローマ・カトリックのフランシスコ派に属し、長方形の園の中に樹齢二〇〇〇年にも及ぶというオリーブの老樹が八本残っています(キリスト新聞社「新共同訳聖書辞典」)。イエスが十字架につけられる前夜、イエスはここで祈られ、捕縛されました。

この有名な「ゲッセマネの祈り」は、マタイによる福音書、ルカによる福音書にも出ていますが、このマルコによる福音書の記事が、もっとも生々しい感じがします。どの福音書でも、イエスは、ご自分が十字架で死ぬ、ということを予告した、と記しています。とすれば、ご自分で覚悟は出来ていたのではないか、と思うのですが、現実とは違ったようです。

イエスはひどく恐れてもだえ始め、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」(三三、三四節) これは、どうしたことでしょう？これまでの歴史の中で数多くの殉教者が出ましたが、かれらの最期は皆立派でした。それに比べると、イエスの最期は、いかにも弱々しい。私は、こう思います。ここでも「真理」であるイエスが表されている、と。ここでも、ご自分の気持ちにきわめて正直だった。そして、ザアカイに「泊まらせて」と頼まれたように、弟子たちに、自分を支えてくれるように「ここを離れず、目を覚ましていなさい」と頼まれるのです。

しかし、イエスに頼りきり、甘えていた弟子たちには、このイエスの苦悩がちっとも分かっていませんでした。マルコによる福音書は、弟子たちの無理解ぶりを強調して書いているという特徴がありますが、それにしても、マタイによる福音書でも(二六・三六～四六)、ルカによる福音

書でも（二二・三九～四六）、弟子たちが眠ってしまった、と記録していますから、弟子たちが、イエスを過大評価していたことは明らかです。「ああ言っているけど、イエス様なら、そのうちなんとかなさるだろう」くらいに思っていたのでしょうか？イエスは、少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、こう言われた。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」（三六節）

イエスの苦難を殉教者の姿として表現しているルカによる福音書では、この様子を次のように述べています。

すると、天使が天から現れて、イエスを力づけた。イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた。（二二章四三、四四節）

とにかく、イエスの心中は、悲しみと絶望感と不安でいっぱいでした。弟子たちは、何も分かってはいないし、悔い改めを迫ったユダヤ教の指導者たちは、かえって頑なになっています。今、死を迎えようとしている時、自分は何をしたのだろうかという虚しさに悲しくて仕方がなかったでしょう。でも、イエスは、その思いをそのまま神様に打ち明けます。

まず、「アッバ、父よ、」と呼び掛けられておられます。「アッバ」というのは、当時のアラム語で、幼児が父に向かって、信頼と親しみとをこめて呼び掛ける言葉です。今日で言えば、「パパ」ということになるでしょう。イエスにおける祈りは、こう祈れと教えられた「主の祈り」においても、呼び掛けは、

「天におられるわたしたちの父よ、」（マタイによる福音書六章九節）

でした。もっとも信頼できる父なのだから、本音で祈る。イエスの祈りの原則でした。「しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」（マルコによる福音書一四章三六節）が続くのですが、その前に、本音を伝えます。これは、私たちの祈りにおいても大切な原則です。

私は、「殺人の祈り」を勧めています。誰かに、ひどい目に遭わせられた。悔しくて仕方がない。夜も眠れなくて、その人の顔が浮かぶ。そういうとき、建前を先行させて、「父よ、あの人を赦してください」なんて祈っても、ちっともおさまりません。ほんとうに、ひどいと思ったら、「殺人の祈り」をするのです。

「父よ、〇〇さんを交通事故でもガンでも結構ですから、一日も早く消してください。私だけでなく、他の人も困っていますし、このことがうまく進まないのは、あの人がいるからです。だから、お願いします！」

腹の底にある言いたいことを洗いざらい出してしまうのです。言いたいだけ全部出してしまうと、やがて神さまの声が聞こえてきます。溜めている怨念を吐き出してしまうと、少し落ち着いてくるのです。

「あれを始末すれば、ほんとうに問題が解決するのか？」

「じれったいこと言わずに、実行してください。」

「おまえはどうなのか？」

「わたしですか？わたしにも問題はないか、ということですか？」

だんだん勢いが衰えて来ます。

「わたしの見方が一方的だ、というのですか？」

次第に、自分自身の方にも目が向けられて来ます。

「そうかも知れませんね。あの人がいる、ということが私にも意味がある、というのですか？」

じゃあ、分かりました。どうぞ、いいようにしてください。」

ここで、ようやく、神様にすべてをお任せすることができるようになります。だから、神様にすべてをお任せしようと祈る場合、必ず、まず本音で祈らなければなりません。私が本音で祈ることを学んだのは、旧約の詩編からでした。

バビロンの流れのほとりに座り

シオンを思って、わたしたちは泣いた。

豎琴は、ほとりの柳の木々に掛けた。

わたしたちを捕囚にした民が

歌をうたえと言うから

わたしたちを嘲る民が、楽しもうとして

「歌って聞かせよ、シオンの歌を」と言うから。

どうして歌うことができようか

主のための歌を、異教の地で。

エルサレムよ

もしも、わたしがあなたを忘れるなら

わたしの右手はなえるがよい。

わたしの舌は上顎にはり付くがよい

もしも、あなたを思わぬときがあるなら

もしも、エルサレムを

わたしの最大の喜びとしないなら。

主よ、覚えていてください

エドムの子らを

エルサレムのあの日を

彼らがこう言ったのを

「裸にせよ、裸にせよ、この都の基まで。」

娘バビロンよ、破壊者よ

いかに幸いなことか

お前がわたしたちにした仕打ちを

お前に仕返す者

お前の幼子を捕えて岩にたたきつける者は。(詩編一三七編)

紀元前九二二年、ソロモン王が亡くなると、ダビデによって統一された王国は、南北に分裂します。その二百年後、紀元前七二二年にまず北イスラエル王国が、アッシリアによって滅ぼされ、残った南ユダ王国も紀元前五八七年、今のイラクのフセイン大統領があこがれていると言われるバビロンのネブカデネツアルによって滅ぼされます。こうして、いわゆる「バビロン捕囚」が行われます。「捕囚」というのは、聖書独特の用語で、現代語で表現すると、「抑留」とか、「虜囚」とまるでしょうか？列王記下二四章一四節以下によると、「国の民の中の貧しい者だけ」を残して、「すべての高官とすべての勇士一万人、すべての職人と鍛冶」をバビロンに連れて行きます。エルサレムは、再起不能に陥るほどにうちのめされます。

この詩編一三七編は、バビロンの地で抑留されていた人の歌です。悔しさが満ち溢れています。故郷のエルサレムに対する愛執がしっかり表現されていると共に、自分たちを侮辱した者たちに対する呪いの気持ちも溢れています。エドムというのは、あのヤコブの双子の兄エサウの子孫です。ユダの南側に住んでましたが、ユダ王国がバビロンに滅ぼされることに対して快哉を叫んだようです。これが悔しくてならない。だから、神に訴えているのです。「主よ、覚えていてください」と。

詩編には幾種類かの歌がありますが、この一三七編が含まれる「哀歌」と呼ばれる類型の歌を私は「神の幼子の祈り」と呼びます。幼子が父のふところに抱かれながら、切々と本音を訴えている感じがするのです。「○○ちゃん、悪い子なの。ボクをぶったの。だから、パパ、ぺんぺんして！」と言った感じです。

だから、「いかに幸いなことか……お前の幼子を捕えて岩にたたきつける者は」も、まさに「神の幼子の祈り」だと思えるのです。こう祈るだけで、スツとするでしょうね。それでいいのだと思うのです。旧約は、人間の本音に対して目をつぶることをしていません。だから、私は旧約が好きなのです。言葉だけをとらえると、「こんな信仰者がいるのか、イエスの教えられた敵を愛するということが全然分かっていないではないか」と思われるでしょう。神様は、私たちの本音が見えない方ではありませんから。捕囚の民もこうした祈りによって、苦難を克服していったのだろうと思います。

私たちの教会員の一人が、昨年、肺ガンの手術のために入院されました。手術は順調だったのですが、それでも術後に痛みが残ったようです。その苦痛の間に、彼女は必死に祈っていました。自分では、人に聞かれたとは思っていなかったのですが、翌朝、看護婦さんが、

「あなたは、クリスチャンですか？ゆうべ、『神様のバカ、神様のバカ』って、繰り返し祈っていましたね」

と言われて驚かれたそうです。でも、その後も彼女の回復は、きわめて順調で、定期検診を受け

ながら、もう何でも挑戦してください、とお医者さまに言われているそうです。ストレスは、病気にとっても大きな敵かもしれませんから、彼女は、精神的に解放されていて、治療の効果がよく出たのでしょう。

イエスは好んで詩編で祈っておられたのではないかと想像されます。あの最期の十字架の上での七つの言葉の中に、詩編の言葉が三つも入っているからです。（「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになつたのですか」～マタイ二七・四六、マルコ一五・三四、詩編二二・二、「渴く」～ヨハネ一九・二八、詩編二二・一六、「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」～ルカ二三・四六、詩編三一・六）

そして「死ぬほどに悲しい」今回の祈りも「アッバ、父よ」と呼び掛けておられます。まず、胸の内にあることを包み隠さず、神様に打ち明ける。こうして苦難の中での魂の平安が確保されて行きます。イエスは、三度同じ言葉で祈られた、と記録されています。その苦難の大ききの程が偲ばれます。しかし、イエスの魂は、平安でした。だから、だらしなく眠ってしまった弟子たちをご覧になっても平静でした。私だったら、ヒステリックに彼らを蹴飛ばしていたかもしれないのに。

「シモン、眠っているのか。わずか一時も目を覚ましていられなかったのか。誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」（一四・三七、三八）

この最後の「心は燃えても、肉体は弱い」というイエスの言葉は、私の生涯に決定的な影響をもたらしました。その時の経験を当時の記録そのままでお伝えしましょう。

#### ぼくのほれたイエス

ぼくが牧師になって、五年目くらいの頃だったと思います。ある日曜日の礼拝の説教が、どうしてもまとまらなかったことがあるのです。

毎朝のラジオ放送で何か話を続けている現在のぼくからは想像しにくいことかもしれないのですが、要するに、はっきり言えば、その時には、話のネタが切れたのです。同志社大学の神学部（牧師の養成機関）に在学しながら、どうしても牧師にはなりたくないと思っていた、その理由の大半は、毎週、話をしなければならぬ、ということでした。ところが、不思議にも、とうとう牧師になって、苦小牧で新しい教会作りに従事し、毎日曜、いや、そればかりでなく、他の日にも、話をするハメになりました。でも大学時代のノートだとか、色々な本などを使って、とに角、なんとか話だけは続けてきていました。まあ、何とかなっていた訳です。

その日の礼拝の説教も、ですから、まあ、なんとかなるさ、そのうちにヒラメイてくる、とたかをくくっていました。土曜日の夜おそくまでかかって、色々材料を探したけど、どうも自分にピンとくるものがない。大体、自分にもピンとこないものは、話したって、聞く人にピンとくる訳がない。だから、しだいにあせりながら、材料探しをやっていました。どうも、あせってるから駄目だ、あすの朝クールなところで探せば、何とかなるだろうと思って、その夜は寝て、次の朝、つまり、日曜日の朝、又、机に向かった。ところが、やっぱり駄目なのです。

八時半から始まった日曜学校も終って、子供たちのにぎやかな声も消えた頃、十時になって、礼拝に出席する人がだんだんやって来た。ますますあせって来ました。しかし駄目。とうとう運



命の時が来ました。オルガンをひく方がやってきて、声をかけられた。

「先生、礼拝が始まりますから、いらしてください」

万事休す！ぼくは仕方ありませんから、この日の礼拝は、みんなで聖書を読むだけにして、正直に、どうしても説教ができませんでした、と礼拝に集まった人たちに、あやまる決心をしました。みんなにあやまる前に、神様にあやまるべきだ、と気がついて、一度立ちかけたのですが、もう一度、机の前に座って、目を閉じて祈りました。

たいへんな犠牲を払って、一週間の活力を得ようと来てくれた人たちに、何と申し訳ないことをしたのだらうと思うと、自分のいい加減さ、無責任さ、怠慢さが責められて、涙が出そうになりました。

「神様、ほんとうに申し訳ないことをしました。どうぞ、許してください。」

心の中でやっとうめくように祈っていると、ぼくの心にひとつの言葉が聞こえて来たのです。

「心は熱しているが肉体が、弱いのである」

ぼくは、ハッとしました。イエスの言葉です。マタイによる福音書二六章四一節に書かれているイエスの言葉です。イエスがいよいよ十字架にかけられるという前の晩に、ゲッセマネという名前の庭で、徹夜で祈られた。その時のイエスは、「悲しみをもよおし、また悩」(マタイ二六・三七) んでおられた。イエスは弟子たちに、

「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っていて、わたしと一緒に目をさましていなさい」(マタイ二六・三八)

と言われて、ひとりで祈られた。ところが、弟子たちには、イエスの悲しみがちっとも通じていなかったのでしょうか。彼らは眠ってしまっていた、その時に、ペテロに言われた。

「あなたがたはそんなに、ひと時もわたしと一緒に目をさましていることが、できなかったのか。誘惑に陥らぬように、目をさまして祈っていなさい。心は熱しているが、肉体が弱いのである」(マタイ二六・四〇・四一)

ぼくは、その時までには、このイエスの言葉が弟子たちに対するお叱りの言葉とっていました。ところが、ぼくの祈りの中で聞こえたイエスの言葉は、何と愛にみちていたことか！

「そうか、そうか、お前もやる気はあったんだよなあ。でも体の方で言うことをきかなかったのだろう？」

そんな風に聞こえたのです。ガックリきていたぼくを、一瞬立ち上がらせるほどの慰めと励ましの言葉でした。イエスは、その後も、二度も眠っている弟子たちを叱りもせず、

「まだ眠っているのか、休んでいるのか。見よ、時が迫った。人の子は罪人らの手に渡されるのだ。立て、さあ行こう。」(マタイ二六・四五、四六)

と、十字架への道に進まれた。

短い祈りの時間だったのですが、瞬間的に、ぼくは、そのようにして、十字架にかかったイエスが、釘を打たれた両手と槍をさされた脇から、血を流しながら、

「さあ、わたしが代わったから、もういいよ、行きなさい」と声をかけてくださったことを感じたのです。

ぼくはためらわずに、礼拝でこの経験を発表しました。後で、みんなに、今までにない、いい説教でした、と喜ばれました。それは、そうですね。受け売りじゃなく、ホットもホット、たった、さっきあったばかりのことだったのですから…。

それ以来、ぼくにとって、イエスはとても身近な人になりました。それまでは、どうしても、神々しくて、近寄りがたい存在だったような気がします。ところが、そのことがあってから、少しずつ、イエスが分かりかけてきたようです。紙に書かれた偉大なる聖者、というのではなく、ぼくの身近に、共に歩いてくれる、ぼくの友であり、ぼくの先生であり、時には、おっかない父親になりました。

おそらく、その時からじゃないかと思います、ぼくの人に対する見方が変わってきたのは。イエスのように、ただ人に、した結果について、単にとやかく言うのではなく、その結果を来らせるに至った気持ちを思いやろうと努力するようになりました。まだまだ充分じゃないことは、よく知っていますが……。

でも、それからハッキリしたもう一つのことがあります。ぼくはイエスの人格のとりこになりました。ほれた、というちょっと安っぽい、どこかにおっかなさもありませんから、……でも、それが本当に、ほれたってということかな？ぼくはこのイエスを出来るだけ人に紹介していきたいのです。（「サンゴ礁」、一九七四年三月号）

これは、今も変わりません。そして、「道」だと言われたイエス様の真似を出来るだけして行きたいと思っています。